

リアル未知との遭遇

工学部工業化学科 2 回生 磯部潤

ケニアに行くことを決めたのは突然だった。5 月のある日、石井から「どうせ行かないと思うけど、ケニアに行かないか？」という誘いがあった。確かに夏休みに海外に行きたい、でも、ケニアは何が起こるか全く予想できないし…と一瞬思った。しかしすぐに、予想できないんだったらそれこそ行かなければ、なんで躊躇した？という反論が浮かんできて、このスタディーツアーに参加することを決めた。エルドレットで土嚢を使って道を修復するのを手伝うと聞いて、自分の筋肉量でははっきり言って力になれるとは思えなかったのだが。

関空から乗継を 2 回し、長時間の飛行でようやくナイロビに到着。ナイロビ空港が数日前の火災の影響か、テントになっていたのが驚きだった。エルドレットに向かう飛行機の出発まで時間があり、両替もしていなかったのも、とりあえずショッピングセンターに向かった。両替所は 10 : 00 から始まるらしかったのも、本屋などで時間をつぶし、もう一度 10 : 00 になってから行ってみた。しかし、全く状況が変わってない。開く気配はない。両替所の横に座っていた人は「これがアフリカンスタイルだ」と言っていた。結局、さらに時間をつぶす羽目になった。日本の常識はここでの常識ではないと痛感した。そして、両替の後、屋上でマサイマーケットをやっていると聞いたので行ってみることにした。そこでは、歩いているだけでめちゃくちゃ声をかけられた。その中の一人につかまってしまったのだが、「お前はもう俺の友達だから特別価格で売ってやる」とかいいながらバカ高い金額を吹っかけてきたのには驚いた。自分に交渉能力がなかったのと、その時はまだお金があったのとで高いのに妥協して買ってしまったのが残念だ。その後、ナイロビから 20 分くらいの飛行でエルドレットに行った。飛行機の上から見たエルドレットは日本では考えられないくらい広大で、自然が広がっていて絶景だった。夜はエルドレットの事務所に泊まったのだが、初日からケニアの洗礼を受けることになったのも、次の日から始まるホームステイについては期待と不安が入りまじりまくっていた。

ホームステイでは今までしたことのない経験をいっぱいすることになった。若干、思っていたのと違うのもあったが。

初日は道直しをするユースグループとの交流が主だった。昼食はタウンの食堂で食べた。ウガリやチャパティという食べたことのない料理が運ばれてきた。ケニアの人々は「パワーの源はウガリだ」というからどんな味がするのかと気になっていたのだ。食べてみると、あっ普通に食べられる、口に合わないということはないという味だったのだが、食べているうちにすぐにお腹がいっぱいになってしまった。確かに、これを大量に食べることができれば強靱な体を作ることができるかもしれないとそのとき悟った。僕は皿の 3 分の 1 程度しかないウガリに苦戦することになったのだが、ケニアの人たちはそれをボール 2 杯分

くらい食べるというからとんでもない。どんな胃をしているのだろうか。昼食の後はパンツが足りてないとかいう奴がいたので、ショッピングセンターに向かうことになった。道が悪いせいでバスが上下左右にもものすごく揺れていて、すさまじかった。バスの中ではサッカーチームの話で盛り上がった。イングランドプレミアリーグはケニアでも映るらしく、特にチェルシー、アーセナル、マンチェスターU が人気らしい。この手の話題は結構どこでも通用するかもしれない。夕食はユースグループのメンバーの家で半分、パーティみたいな感じで食べた。そこには5歳と1歳にもならない子供がいて、5歳の方はカメラに夢中だった。ひとたびカメラを取り出せば使いたがってくる。一度とられてしまうと取り上げるのも面倒だ。彼からすればカメラでさえ、珍しいものなのかもしれない。夕食にもウガリは出てきたのだが、昼食ですぐにお腹がいっぱいになることは分かっていたので、あまりとらないようにした。彼らは食べろ食べろと言ってきたのだが。夕食後、ホームステイ先はナンシーという人の家に決まった。ここからウルルン生活が待っているはずだった。シャワーは冷水しかないのだが、ナンシーが水を温かくしてバケツに汲んでくれたおかげで、快適にシャワーを浴びることができた。聞いていた話では桶一杯分の水を外で浴びてくるというものだったので、あれ？とは思ったのだが。ベッドもふかふかで心地よかった。

2日目 7:00 の起床。ホームステイ 2 日目はついに土嚢の作業。道からいったん泥をかき出す作業をやってみたが、当然のごとく、現地の人のパワーには全く及ばなくて、もっとウガリを食えというアドバイスを言われる羽目になった。泥を土嚢袋に詰め込む作業や土嚢袋を運んでコンパクターという道具でたたき作業をしたが、いずれも力作業でなかなか大変だった。作業は4時間くらいであったが、かなり筋肉にダメージを受けた。その後、昼食をとり、向かったのは耳の聞こえない子供たちが通う学校だ。そこで子供たちとともに苗木を植えた。彼らは人懐っこく、すぐに僕らに関わろうとしてくれた。これも日本ではできない経験だ。彼らは確かに耳は聞こえないのだが、とても楽しそうにしていた。そして、その後は夕食。また一瞬カメラを見せたすきに子供とカメラの取り合いになってしまった。カメラを見せないというのが最善策なんだが、写真を撮れないというのは残念だった。夜はチャイ（ケニアの紅茶に大量のミルクを入れたもの）を2杯飲んだ。これがすごくおいしく、ケニアにいる間でおそらく、10杯以上は飲んだだろう。

3日目 7:00 起床。この日はファンタスティックな経験ができた。朝、おいしいチャイを飲み、道直しに出発。この日の作業は辛かった。前日の筋肉痛が残っており、しかも、雨が降ったせいで土嚢の泥が重くなっていて、より筋肉が必要な状況に。僕は、カートに乗せて、3つの土嚢を持っていくのが限界だったのだが、ケニアの人はその倍の6つも運んでいた。あれを真似することは可能なかと疑ってしまうくらい、パワーの差をこの日も痛感してしまった。昼食をとったあとはみんなで博物館兼動物園のようなところに行った。その2つをなぜあわせた？という組み合わせではあるが。そこでいろいろな動物を見たのだが、僕らよりもむしろユースグループの人たちの方が楽しんでいた、すごくはしゃいでいた。彼らはケニアに住んではいるものの、ライオンたちが生息している国立公園のよう

なところには行く機会がないらしい。これは意外。それ以上に衝撃的だったのが、ケニアに来る前にこういうところに泊まるんだろうなと思っていた家が「古代の家」みたいな感じで展示されていたことだった。「なぜここにある？」と思わずにはいられなかった。それからタウンに向かってなんとディスコに行った。そのときはもうすでにかかなり疲れていたのだが、ビールを飲んでいるうちにテンションが上がってきて、踊りたくなってきた。踊るとさらに酔いが回ってきてよくわからない状態になったが、とにかくすごく楽しかった。帰りは酔いと疲労でくたくただったのだが、道がぼこぼこ過ぎて、帰りの車では全然眠れなかった。平らな道に直してもらいたい。切実に。

ユースグループの人たちはみんな親切で、特にナンシーは常に何か困っていることはないかと気を遣ってくれていた。本当に感謝したいと思う。また、ケニアでは車の荷台に人が乗ることが許されているので、ここぞとばかりにオフィスまで戻る車では全員で荷台に乗り込んだ。荷台から感じる風は最高に気持ちよかった。ちなみに、バイクは普通に3人乗りしているのを見かけるが、ユースグループの人曰く、5人乗りをしたことがあるそう。発想がぶっ飛んでいる。



ナンシーの家にて

エルドオフィスで1泊した後はナイロビに戻って、別の道直しの現場を視察させてもらった。そこまでの山道もかなり壮絶なものであったのだが通ることはできた。道直しして

いた部分はもししていなければ、通ることもできなかったのかもしれない。そういう意味では、どれだけ揺れても通ることができるだけでもありがたいことなのかもしれない。

この後も、サファリに3日間、スラム視察、マトマイニチルドレンホームに2日間滞在など、日本ではありえない活動、生活をする事ができ、色々なものを見ることができた。そこで、今まで持っていた固定観念、例えば、スラムは汚いし、治安が悪いし、貧しい人が過ごしていて、それらの人はもっといい生活を求めているのだろうということなどがどこまで正しくて、どこから違っているのか大雑把に知ることができた。確かにスラムは治安が悪く、川や道にごみが捨てられていて異臭がして決してきれいな場所ではなかったが、その生活以上のものを求めているのかといえば必ずしもそうとはいえない。子供たちはとても楽しそうに遊んでいるし、劇場のようなところでサッカーの試合を見てエキサイトすることもできるようで、みんな割とその生活を楽しんでいるようだった。マトマイニでも子供たちは孤児なのだが、何をするにも笑顔が絶えなかった。こういったところは僕が今まで持っていたイメージと大きなギャップがあったので驚いた。また、当然イメージ通りだったところもあり、マサイマラに行ったときに定番のマサイ族のジャンプを見ることができた。僕らも見ていただけではもったいないので、一緒にジャンプしたのだが、彼らの本気のジャンプは衝撃的な高さで、僕らでは及ばなかった。世界の壁を痛感した。



マサイ族とジャンプ！

2週間のケニア滞在からかなり多くのものを学ぶことができた。世界には色々な生活スタイルがあり、その中で今回はケニアの生活をホームステイを通して、知ることができた。そして、現地の人と土嚢を使った道直しを一緒にして交流を深めることもでき、素晴らしい経験ができた。改めて、このスタディーツアーに参加してよかったと思う。日本に比べて、適当な部分があったり、治安が危なかったりするが、このスタディーツアーで、アフリカを、ケニアを本当に好きになった。いつかまた、機会を作ってあの場所に戻りたいと思う。